**〔解説〕**明和八年（一七七一）大坂竹本座初演。近松半二らの合作で、全五段の時代物。当時衰退していた竹本座がこの作品の大当たりにより盛り返したと言われるほど、人気のあった作品です。物語は藤原鎌足親子による蘇我入鹿討伐を題材に、大和地方の伝説や謡曲、幸若舞曲などを取り入れ複雑な構成の大作となっています。

天智天皇の御代、蘇我入鹿は天皇派の藤原鎌足を失脚させ、自ら帝位につきます。入鹿は母が白い牝鹿の生血を飲んで生まれた為、超人的な能力を持っていましたが、爪黒の鹿の血と嫉妬に狂った女の血を混ぜ鹿笛に注いで吹くと、その力が失われるという宿命でもあり、ついにはその弱点を突かれて討伐されるのでした。

**〔鱶七上使の段　あらすじ〕**三笠山の蘇我入鹿の御殿で宴が催されているところへ、藤原鎌足の使者として鱶七(ふかしち)という漁師がやってきます。鱶七は鎌足からの降伏の書状を渡しますが、入鹿は信じず、鱶七を人質とします。鱶七が剛胆にも横になって寝ていると、槍や毒酒で殺されそうになります。鱶七はまったく動じず大胆に振る舞うのでした。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。

(一般社団法人　義太夫協会発行)

**鱶七上使の段**

栄ゆる花も時しあればすがり嵐のあるぞとは、いさ白雲の高御座。新たに造る玉殿はかの唐くにの阿房殿。ここに移して三笠山。月も入鹿が威光には、覆はれますぞ是非なけれ。腋門の方より宮越玄蕃、荒巻弥藤次。御前よきまま高う吹く、帆かけ烏帽子も十分に、のけぞり返り入り来たり、

「ホウ仕丁ども朝清めな。イヤなに玄蕃殿、このたび新たに築かれたるこの山御殿。朝日に輝くところは吉野龍田の花紅葉。一度に見るとも及びますまい」

「ナニサ〳〵。イヤモ言語に述べがたみきお物好き。瑪瑙のうつばり、珊瑚の柱、水晶の御簾。瑠璃の障子。コレ見られよ。飛石は琥珀、砂は金銀、また釣殿に登り見おろせば、春日の杉も前栽の草びら、若草山、つづら山はまき石同然猿沢の池はお庭の井戸に見えまする」

と話の尾に付く仕丁ども、

「アヽ、結構な御普請でござります。さうしてなにやらふつ〳〵と好い匂ひが致します」

「オヽその筈、縁板、おばしまに至るまでみな伽羅と沈」

「シタリ抹香や鉋屑とは違うた物ぢゃのう。又次」

「サイノウ、またお学問所は唐を写して唐木ぢゃげなの」

「ハアン、その唐木とは何々ぞ」

「オヽまづ花梨」「フン」

「紫檀」「フン」

「黒檀」「ホイ」

「たがやさん」「ホイ」

「うらやさん」「ホイ」

「当卦本卦」「や」

「手の筋」「や」

「男女相性」「や」

「墨色の考」「コレ〳〵」

「失せ物、待ち人」「コレ〳〵〳〵」

「書き判の善悪」

「アヽコレ〳〵、そりゃ山御殿ではなうて山伏ぢゃぞや」

「サア王様もこの山で寝やしゃるによって山伏ぢゃ」

「エヽ人を嘲弄するかな」

「イヤ長老とは坊主のことか」

「イヽヤ女子の事ぢゃ」

「そりゃ女郎ぢゃ」

「イヤ如露とは花に水かける物ぢゃ」

「エヽどう言やかう言ふと、なんぼ貴様がくずなの弁でもおれにゃ敵はぬ」

「ヤイ富楼那の弁ぢゃ、くずなとは魚ぢゃわい」

「イヤくずなぢゃ」

「イヤふるなぢゃ」

「くずなぢゃ」

「ふるなぢゃ」

「くずなぢゃ」

「ふるなぢゃ」

「くずなぢゃ」

「ヤイ〳〵騒がしいそりゃ何事、清めしまはば早く下がれ。みな行け〳〵」

と追立てやり

「アレお聞きあれ弥藤次殿、我が君この殿へ御移りと見へ、物の音近く聞え申す」

「いかさま、さよう」

と威儀つくろひ厳重にこそ、控へ居る。花に暮らし、月に明かし、酒池の遊びに酔ひ疲れ、御殿々々の通ひ路も数多官女が道楽に、君の機嫌をとりかぶと、調ぶる笛やしゃう、ひちりき、大鼓の音も鶏徳に、己が不徳を押し登る。うんげんの深縁、蜀錦のしとねの上、むんずと座せし有様は、実に類ひなき栄華の殿。玄蕃、弥藤次頭をさげ、

「先だって卿上雲客たちより君の寿を祝し申されし数の島台、ソレ女中方、叡覧に供へられよ」

『アッ』と答へて持ち出づる、思ひ思ひの飾り物。

「なにがな君が寿を祝ふ鶴亀松竹の影は千尋の深緑。松と鶴亀合はせて見れば一万二千の齢を君に譲り寿ぐ蓬莱山。さてまた次の島台は、周の帝の寵妃仮りの情のおととぐさ。実に寵愛の色菊や、葉毎を染めしその筆の命毛長き八百歳。老いせぬや、老いせぬや。薬の名をも菊の酒、酌めども尽きぬ泉の壷。殿上人の方々より御祝儀なり」

と相述ぶる。一しほ興に入鹿が悦び。

「オヽ百司百官より下万民に至るまで、我が在位長かれと願ふことめい〳〵が身の冥加なれば、猶ばんぜいを唱へよ」

と高慢我慢のみことのり。『はっ』と両人階下にひれ伏し、

「我われは申すに及ばず、民百姓も野に手をうって舞ひ楽しむ。誠に戸ざさぬ御代と申すは今此の時に候」

と滅多に追従。猩々の人形に見惚れ官女たち、

「コレ〳〵この猩々が手に持った酌盃も取りはづし、壷にはまことのみきを湛へた。これで御酒宴始めうか」

「いかさま。それはよい御慰み。サア〳〵早う」

と取りどりに手まづ遮る盃の、廻れや〳〵万代も尽きじ、尽きせぬ歓楽の興を催すその所へ

「ものまう、頼みませう」

とどってう声。ばちびん頭の大男。御殿間近くぼっか、ぼっか、ぼっか、ぼっか。着たる木綿の長かみしも。糊しゃきばって立ちはだかり。

「エヽ入鹿殿はこゝぢゃな。内になら逢はして下んせ」

と木で鼻くゝるむくつけ詞。宮越、荒巻目にかど立て、

「ヤア何奴なれば、君の御前ともはばからぬ馬鹿者め、すさりをらう」

ときめ付くる。

「イヤ俺や。難波の浦の鱶七と云う網引きでござんすが、いつやらからこっちの方へ宿替してごんしたお公家どの、鎌きりのだいしんから雇はれて来た使でごんす」

といふを、遙かに見下ろす入鹿。

「ハテ心得ぬ。その鎌足めは首陽山のむかしを学び、跡を隠せしと聞きしに、さては難波の浦に在りけるよな。普天の下、率上の浜、王地にあらざる所なければ、今日まで飢えにも臨まず健固にをりしは我が恵みならずや。それを思はばとくにも参り恩を謝すべきのところ、使を立てしは緩怠なり」

「エヽそれおれが知った事かいの、かう見たところが余程短気者ぢゃわいの。しかし喧嘩はこなんの様にこつきで行くのが徳ぢゃ。鎌殿も一旦は言ひがかりて、てっぱって見ようと思はれたさうなが叶はぬやら、どうぞおれに往て挨拶してくれてて、それは〳〵きつい弱りいの。大慨な事ならもう了簡してやらんせ。懇ろな中は得て心安立て、間違ひがあるものぢゃてのう。コレ仲直りの印ぢゃてて、酒一升おこされた」

と刀の提げ緒にぶらぶらと結びし徳利。きっと目を付け

「未だ日本に渡らぬ兵器唐土にありと聞く。飛び道具のたぐひなるか。何にもせよ怪しき物を所持せしぞよ。かたがた油断致すな」

と眉をひそめて身構へたり。

「エヽとっけもない。とっくりと見やんせ。酒ぢゃ酒ぢゃ。コレそこなお手代衆。早うコレ、進ぜさんせ」

「イヽヤ善悪知れざる鎌足より差し上げし酒ならば、毒薬仕込みあらんも知れず。奉る事罷りならぬ」

「エヽまはすわ〳〵。どれおれが毒味してやろ、茶碗はないかえ、そんなら赦さんせぢきやりぢゃ」

と言ひつゝ徳利の口から口。

「オヽよい酒ぢゃになあ。これを飲まぬといふことがあるかしらぬ」

と振って見て、

「ヤア〳〵南無三。みな飲んでしもた。エヽひょんな事してのけた。ヤコレひょっと鎌殿に逢はんしょとまゝおれが飲んだと云はずに、よう届いたと礼いうて下んせや」

とがむしゃな様でも正直者。真面目になって気の毒顔。

「アヽまだ何やらことづかって来たが落しはせぬか」

とふところ探し、

「オットあるわ〳〵、サアこれ見やんせ」

と一通を渡せば、弥藤次押し披き、

「ナニ〳〵我れ不肖たるによって、暫く心を惑はすといへども、いま一天四海御手の内に落ち入る事、正しく天の譲り給ふ万乗の御位、入鹿公に背くは天に背くと同じと先非を悔いてこゝに降参を乞ふものなり。いまより臣下に属するのしるし。君の齢を東方朔にたとへ、この桃花酒を以て御寿を祝し奉る。内大臣藤原の鎌足謹んで申す」

と読み上ぐる。

「ハヽヽヽなまくら者の鎌足め。臣下とならんなんどとは、イヤしらじらしき偽り奴」

「なんぢゃ、鎌殿を嘘つきとは、何ぞ確かな証拠がごんすか」

「ヤア小ざかしき証拠呼ばはり。彼れが心腹いうて聞かさう」「ドレ聞きませうか」

「まづ、この入鹿を東方朔に譬へたるが野心の証跡」「そりゃ又なじょに」

「オヽ昔漢の武帝が代に、東方朔といへる奴、三千年に一度実を作る桃をみたび盗んで喰ひし故九千年の齢を保つ。桃に百の縁をかたどり、ももしき百官を手に入れし入鹿を盗人なりといはぬばかりの底巧み、憎っくいやつ」

と居たけだか。

「イヤ〳〵それゃ無理ぢゃ、無理ぢゃ」

「ヤアうず虫め、何を知って小癪やつ」

「イヤ何にも知らんけど、代りになって来た俺ぢゃによって一番いふのぢゃ」

「オヽ鎌足が代りならば、これをも代りに試みよ」

と、そばなる島台押し取って、眉間へはっしと打ち付くる。台は微塵に飛び散れど、びくとも動かず。

「アヽ好い加減にだだけさしゃれ。その厄払ひの代物。東方朔とやらに譬へたというてごうわかすのか。年にあやからんせとこそ書いておこさしゃったれ、盗人と書いちゃないぞや。それにそちから色々な講釈を付けて盗人せんさく。知った同士は涼しいとやらで、盗人の覚えがあるかして今の投げ打ち。アヽこなんは正直な人さんぢゃと世間の噂。見ると聞くとで大きな違ひマアそんな盗人と鎌どんを懇ろには俺がさすまいわいの。じんたいにも似合はぬ事さんすの。よもやさうぢゃあるまいかの。ただし覚えがござんすか。イヤさうかいの」

と文盲だらけも理屈は理屈。

「どうじゃいの〳〵どうでごはる」

とやり込むれば、邪智の入鹿もにが笑ひ。

「ハテ口がしこく言ひ曲げしな。うい奴、でかした。その褒美には鎌足が実否を正すまでおのれは人質。最早や篭中の鳥同然。帰る事はならぬと思へ。ヤア〳〵玄蕃、弥藤次、いざ萩殿にて天盃をめぐらさん。来たれや」

と引き連れて帳台深く入りにけり。

「ア、コレ〳〵おれを質に取らしゃると、着物や道具と違うてしろものが飯喰ふぞや。しかしあのごうはらでは大抵では喰はしをるまい。オヽ空腹に今の酒でよっ程酔が来たわい。ドリャ何処でなと一寝入りやってこまそ」

と伸び上がり

「エヽ腰が重い筈よ。この大小。らっちもないものを差さしておこして、あた面倒な」

と縁板へぐわたりと、鳴るは合図かと。突き出す鎗はしのすすき。構はずころりひぢ枕。不敵なりける男なり。御所より外へ咲き出でぬ、若き御達が入りかはり男見に来る愛想には、お茶よ、お菓子よ、煙草盆。銚子かはらけ持って出で。

「コレそな人は何御用でお召寄せありしは知らねど、さぞ待ち久しう気もつきよう。九献一つ」

と差し置けば、からだ寝返り、腹ばひに頬杖つくづく打眺め、

「フン貴様は誰れぢゃ」

「オヽ、我れわれは上様の身近く召さるゝ女ども」

「何ぢゃ短い女子ぢゃ。ドレ〳〵立って見い〳〵なるほど。どれもこれもよう煮え込んだものぢゃ。わいらはこゝな飯焚ぢゃな。テモけうな前垂しているな」

「エヽつがもないざればみごと。わしらを問ひやるそなたの名は」

「オヽ鱶」

「ナニ鱶とは」

「ハテ商売の夜網に出りゃ、沖でも磯でも行き当りに、よう寝る故に鱶七といふ漁師々々」

「ヤア料紙とは何ぞ書いてたもるのか。それならば必ず絵や歌はいやぢゃぞや。いま難波津で持て囃す、歌舞伎芝居のその中でもよう聞き及んだ文七や八蔵の紋ならば書いて欲しい」

としどもなき。桜の局すり寄って、

「さうして下々は皆そなたの様な男かや。よい男もたんとあるであろ。地下の女子はうらやましい。芝居は見次第、好い男は持ち次第、ほんにまたこの御所女には何がなる。見るも見るも冠装束窮屈で急な逢瀬のその場でも、衣紋の紐よ、上帯よ、解くかほどくか、大抵では下紐迄は手がとどかず、ついその内には花に風、月に叢雲さはりが出来て、本意ない別れをするわいの」

といふさえ顔に紅葉の局。

「中将や小将あたりで恋すれば、あのおいかけが邪魔になる、尻目づかいは出来ぬ〳〵。その上悋気いさかひもこっちからは檜扇で叩けば、あっちは笏でとめ、つっぱりかえっていきったばかり。いらうても見ぬ逆ほこの雫情も受けて見ず、しんき〳〵で暮らそより、いっその事に玉の緒も絶えなば絶えたがましであろ。もしもや誘ふ水しもあらば、往にたいわいの」

と鱶七にひしと二人は抱き付く。びっくり敗亡、ごう煮やし、

「エヽけたいな衒妻めら、あっちへきり〳〵うせあがれ」

とけんもほろろに言ひちらされ、

「さってもすげない恋しらず。玉の盃底ぬけ男。不骨者よ」

と不興して、本意なく奥へ入りにけり。あたり見廻はし長柄の酒。庭の千草にさら〳〵と潅ぎかくれば、忽ちに葉立ち変じて枯れしぼむ。

「ハヽヽヽヽフヽヽ。最前の鎗といひ、またぞろやこの毒酒。ハレヤレきつい用心」

と猶打ち見やる庭先へ、弓と矢つかひ、ばらばらばら、追取りかこませ宮越玄蕃。

「いかにしても心得ぬつら魂。尋ね問ふべき仔細のあれば引っ立て来よとの綸言なるぞ。早く参れ」

「オヽ呼びにごんせいでも行くのぢゃ。かりそめにもびこ〳〵と、ちょっとでもさはるかいな、腰骨踏み折り疝気の虫と生き別れさすぞ。ヤコレ家来どもさん、わろ様たちもその鳥おどし放すが最期、取っ掴まへて首引抜き、かたはしからぬたにするぞ。ヤどりゃ、おれから先へ行きやんしょ」

と事とも思はぬ大胆者。胸の強弓矢ぶすまを引明け

（てこそ入りにける。）